

認証のいかがわしさ

認証ビジネスというのがあるようだ。もちろん、人々が利用する工業製品、農業製品、食品等、人々が自ら利用するものについてについて、例えば、JIS 規格とか JAS 規格とか、文書化された規格にもとづいて、何らかの機関がその正当性を保証することは必要だ。そうした認証を積み重ねることによって、認証基準も改善されて、製品の質も向上していく。自らの製品や技術の向上のために、界団体や利用者が参加する第三者的な民間機関が認証を行うことは、公共の立場からしても良いことだ。

言いたいことは、何でもかんでも認証が必要なのかということである。ミシュランガイドが「認証」なのかどうかは知らないが、世間一般には、「三ツ星レストランとして認証された。」というような受け取り方がされている。ミシュランはもともとタイヤ屋さんだから、業界お手盛りというわけではない。しかし、怪しげな噂がないわけでもない。だからいかにという気もないが、そもそもそんなものが必要なのかと思う。食べ物の嗜好は文化的背景や育ちによるから、認証によってそれが旨いと保証されても困る。私は上流階級や文化的で教養のある家庭に育ったわけではない。いわゆる育ちが悪いという人々に属する。上流階級や文化的な教養人の間で作られた味の嗜好が私にわかるはずがない。しょっぱい漬物で飯を掻き込むような食事を子供のころからしていたから、やたらにしょっぱい味が好きで、家人からもそれを非難されている。安酒しか飲んでいないから、安酒に合う料理しか知らない。食事のマナーもよくない。私と違う文化背景を持った人たちが集まる店に行くと、ろくでもない作法で不味そうに食事をすれば、店の人々や他のお客を不快にさせると思うから行かない。たまに間違っってそういう店に入ってしまうことがあるが、その場合、迷惑をかけないように安いものを頼んで、さっさと食べてすぐに店を出る。知った風な態度で変に迎合したり、逆に尊大な態度でその店を否定したりするのは周囲の人を不快にする。これはある種の礼節だ。「礼節を知らざる者は禽獣の如し」と父に教わった。その程度の配慮は私にもある。食べ物などはたわいのない遊びの世界だから、認証というような遊びがあっても、それを楽しむ人がいて、実害がないのならばそうしたらよい。

問題なのは最近いろいろなところ認証ビジネスのようなものが出てきて無視できなくなっていることである。世界遺産の認証ぐらいまではまあいかなと思っていただけだが、世界記憶遺産とか農業遺産とか、あれはいったい何だ。何の意味があるのかわからない。そもそも、国連機関であるユネスコや FAO の認証というところが怪しげだ。国連機関というのは、国際的な政治の場だろう。政治というのは裏も表もある世界でもともといかがわしいものだ。そういう場で認証などという行為を行おうとすることがそもそも間違いだろう。政治的に歪曲されるだろうし、そういう疑いの目で常に見られる。こういう常識的かつ本質的な問題を考える人は国連機関にはいないのだろうか。UNESCO などはアホの集団にしか思えない。認証を受けたいという人の気持ちもわからない。自分たちが大切にしたいと思うものを大切にすればよいのである。わかる人にはわかる。

HACCP というのもあるが、国際貿易の中で非関税貿易障壁として悪用されているように思う。食べ物を食べるということは、物の取り込みだから、生物にとっていつでも危険が伴う行為だ。物を食べるときには、そうした危険をいつでも頭の隅に入れておかななくてはならない。そうした警戒感のない人間は、HACCP があるがなかろうが食あたり苦しんだりする。そうした教育は子供の時からしておく必要がある。それだけのことである。

民間の認証機関というのも怪しげだ。漁業認証というのがある。これは民間の認証機関が行う。様々な漁業認証があるが、中には認証を受けるための手続き費用がえらく高いものがある。こういう認証団体の後ろには自然保護団体などの NGO が後ろにいて、彼らに攻撃されないために、欧米の大手スーパーチェーンなどは認証を受けている。一方、認証費用が払えない小規模で零細な漁業者は単独では認証を受けられない。もっと大きな単位たとえば県漁連や大きな地域単位で組織を作って認証を受ければよいと考えるかもしれないが、沿岸の零細漁業は様々な漁具を使って、漁獲対象種も様々で時期によって変化する。その変化は地域によって一様ではない。また、自然環境も社会環境も地域によって異なる。効果的に資源管理をしようとするれば、地域の個別的な判断が必要になる。こういう問題は、単一魚種を大量に漁獲する資本漁業にはない。結局のところ、地域の零細漁業は認証対象にならない。したがって、彼らの主張する生態系の保全は達成されない。理想として掲げたことと結果として得られることの間には大きな乖離があり、何のためにやっているわからなくなる。人によっては、こうした活動はユスリ・タカリの類だと言う（関係の人々には言いがかりのように聞こえるかもしれないが、実際、そういう意見はある。）。きちんと文書化された基準と手続きに基づいて認証が行われ、その手続きの正当性を認定するシステムがあれば問題ないという考えもある。しかし、この基準を作ることはかなり難しい。例えば、すでに述べた沿岸の小規模漁業の生態系保全の例である。何を基準とすべきか、維持すべきレベルや、その方法が、自然環境や社会環境によって大きく異なるからである。

大学の教育認証というのに関わったことがある。大学に入学してくる学生やその家族もさまざまである。大学は地域性や歴史をもっていて、大学の成立背景や教育目標は大学によって異なる。そうでなければ困る。しかし、そうなると、例えば、学生を統一的な試験で試験して、それぞれの科目で何点以上というような基準は作れない。教えている内容が違うからである。最低基準というようなものは考えることができるが、それは極めて低い水準に設定されることになる。大学として大切なのは、専門性であって、どんな学生を作ろうとしているのか自ら教育目標を設定して、その教育目標に達したものを卒業させなければならない。自ら掲げた教育目標の達成水準は高く保ってもらいたい。そうでなければ大学教育の意味がない。そうなると、大学自らが独自の教育目標を掲げ、それを社会に公表し、その達成のための教育プログラムを作り、そのプログラムの有効性を不断に確認し、改善を加え、常に水準に達した人間を卒業させていることを確認する以外に方法はない。教育や生態系保全は工業製品ではない。単純な規格や基準で客観性を持つことはできない。それをすることは、啓蒙主義であり、差別主義であり、植民地主義なのだ。

一方、生態系保全は重要なテーマであり、漁業認証のような形で、それを達成する努力をすべきだという意見もある。傾聴すべき意見だが、目標は生態系保全だろう。それにつながらなければ意味はない。途上国まで視野に入れば、問題になるのは貧者が行う破壊的な漁業だ。ほかに収入を得る手段がなければ、収入を得やすい魚種に漁獲が集中する。漁業認証のような形で貧者の漁獲物を市場から締め出せば、生態系はもっと破壊されるだろう。

我が国は、非欧米系唯一の先進国である。後発途上国の立場が分かるという特性を持っている。その立場から、後発途上国の現状や意見を欧米系の先進国に伝えるという重要な役割を持っている。認証にかかわるコストや時間などを含めて、欧米で一般化している認証とは、異なる認証システムを提案することを考える必要があるだろう。

今日、各国で台頭しているポピュリズムに依存した政治家の問題が危惧されている。しかし、そのような政治家を支持する大衆が感じている不公平感を一つの主張として聞くべきだ。私は、ある種の「正義」を当然のこととして、自らの平然として正義を語る人々に対して、たまには内省することを勧めたい。貴兄が貴兄の正義を主張することは構わない。しかし、私が大衆酒場で酒を飲んでいるとき、お前の飲んでいる酒は安酒だとか、そのつまみはまずいとか言うことはとても下品なことなのだ。襤褸は着てても心は錦。私の知っている良い職人は絶対に自己主張をしない。ただ淡々と、自らの仕事を認めてくれる人に対して、丁寧に淡々と自分の仕事をするだけだ。私は彼らが好きだし尊敬している。美しいとはそういうことなのだ。